

たりは、二冊買つても損をしないようにという、あるいは新しくもう一冊買つてもらうという小高らしい工夫なのだろう。

それにしても、『現代短歌』に載っていた歌人のうち、約二十人が『現代の歌人』で消えてしまったのはなぜだろう。外れたのは佐藤佐太郎、葛原妙子、寺山修司、小野茂樹、中城ふみ子、上田三四二、島田修二、宮柗二、木俣修といったそうそうたる面々だ。故人を外したのなら、井辻朱美まで外したのはおかしいし、『現代の歌人』に二〇〇二年に亡くなった斎藤史が残っていたり、〇一年に亡くなった小暮政次を新たに入れてやるのも理解できない。

二冊はそれぞれ一冊で楽しめ、相互補完的でもあるが、どちらも完全なアンソロジーではない。優れた編集者である小高がそのことに気づいていないはずはないから、一四年二月に突然の死を遂げなければ、いづれ完全な一冊を編んだに違いない。それを見られないのは残念でならない。

『近代短歌』も近代の歌人七十七人の歌を紹介し、それぞれに解説を付すという編集の基本は一緒だが、編著の『現代短歌』

などとは異なり、「編」とされている。小高は最多の十九人を担当したものの、大島史洋、小紋潤ら計七人の執筆者の一人にすぎない。さすがの小高も近代の歌人全体への目配りは難しく、助けを借りたようだ。ちなみに小高の担当は、石川啄木、釈道空、中原中也、萩原朔太郎、宮沢賢治といった人たち。短歌の世界以外でも活躍した人が多い。小紋潤は佐佐木信綱、石樽千亦ら『心』の花。関係の歌人を多く担当している。

小高による石川啄木の解説は、こう始まる。へ茂吉より、白秋より、俵万智より人気のある歌人は石川啄木である。やっばり、ここでも「つかみ」が上手だ。

三冊のアンソロジーを概観すると、あらためて小高の本質は編集者だと感じる。ムック『シリーズ牧水賞の歌人たち 小高賢』（青磁社）の永田淳によるインタビューで自身、こう語っている。へどこか、小高といった仮面をかぶっているへ鷺尾という製作者が、小高という歌人を演出している。

『中央公論』『東京人』の粕谷和希、『文藝』『海燕』の寺田博ら名編集者四人で藤原書店から出した『編集とは何か』で、小高

は鷺尾名で「編集は××だ」というタイトルの十一の小文を書いている。「編集は企画発想だ」「編集は足だ」「編集は我慢だ」「編集はジャンルだ」「編集は人間関係だ」……。広い知識と目配りが必要なアンソロジーを三冊も編むには、鍛え抜いた編集の力が不可欠だった。そして、これらのアンソロジーは、実際に売れた。この原稿を書くために購入した『現代短歌』は八刷、『現代の歌人』は三刷。本は初版が七割売れたら元が取れると言われているから、悪くない。

小高の、その先にある夢はなんだったのか。前出の『小高賢』の伊藤一彦によるインタビューでは、こう語っていた。へもう少し近代文学史とか、近代思想史の中に短歌を位置付けられないかへある意味では、文学史の書き換えみたいなことはやりたい。時間さえあれば、できただろう。

残念ながら夢はかなわなかったが、その代わりに数多の本を残した。へ月光に晒され歩むわが身か。楷書たに生きて草書に死なむ（『液化化』）。見果てぬ夢は夢として、志のままに一生を駆け抜けたのではないか。